

書 評

図説免疫学入門 ▶ D. Male 著／山本一夫 訳

図説免疫学入門／D. Male 著／山本一夫 訳／東京化学同人 2018／A5判 168ページ／2,300円＋税

本書は、免疫学の教科書として定番の“免疫学イラストレイテッド”の原著編者の1人である、デイビッド・メール教授が執筆した、“*Immunology: An Illustrated Outline* (5th Ed)”の日本語訳である。今やありとあらゆる膨大な領域に関わる免疫学の既存の成書とは一線を画し、これまで免疫学に触れたことがない学部生から、免疫学に関わる大学院生、および免疫学研究に従事しているポストドクや若い研究者まで、幅広い読者が各々の立場に応じて有効に使いこなすうる、ある意味とても珍しい教科書となっている。

古くは紀元前より、一度かかった病気には二度かからない（あるいはかかりにくい）いわゆる“二度なし”現象としても広く知られていた免疫現象は、18世紀末の種痘法の確立などを皮切りに、多くの著名な研究者に支えられて爆発的に発展した。とくに近年では分子生物学の発展にともなって、サイトカイン類や、それらを産生する免疫細胞の機能分子群の遺伝子クローニングが進み、フローサイトメーターによる各免疫細胞の分離と詳細な機能解析へとつながった。並行して免疫不全症や自己免疫疾患、がんやアレルギーなどの様々な病態との関連研究も大きく進み、遺伝子改変動物を用いた *in vivo* 病態解析と相まって、病態制御を通じた治療法開発が大いに発展した。このように免疫学は、ありとあらゆる生体応答に関与しうることが分かってきたがために、通常その教科書は、そのほとんどを網羅することを目論んだ何百ページにもわたる分厚い書物か、基本的な情報のみを必要最小限に絞り込んだ入門書のいずれかにならざるをえない。ところが本書を開いてまず驚くことは、コンパクトな装丁からは予想できないほど、基礎

免疫学の必要十分かつ新しい情報が網羅的にまとめられており、書籍のタイトルから筆者が勝手に描いた思い込みをはるかに超えた素晴らしい出来栄となっている。これを可能にするために本書では、「免疫系」、「免疫の認識機構」、「免疫応答」、「免疫不全症」、「免疫学的手法」の大項目の下に66個の重要なキーワードを掲げ、各項目で周辺の知識を解説するという方法を採用しており、ある意味でサブノートの構成をとっている。単著であるため、全体にわたって記述が統一されて非常に読みやすい上、絵記号を用いたカラーの図、巻頭に“キーワード検索”としてまとめられた索引や、丁寧な日本語訳も理解のための大きな一助となっている。

免疫学を初めて学ぶ人は、わずか150ページほどの本書のなかでも1～3章（「免疫系」、「免疫の認識機構」、「免疫応答」）を通読することで、免疫学の概要をつかむことができるし、免疫学を履修中の人は、それぞれ興味のある項目を読んで必要な基礎知識を得た上で、必要に応じてより詳細な教科書や論文をあたれば良い。とくに医学部生は、第4章「免疫不全症」を重点的に読み込むことで、各種疾患と免疫との関係性がより明確になるし、免疫学研究に従事する人は、上記に加えて第5章「免疫学的手法」に記載された実験手技を確認すれば、自身の研究に役立つ知識が得られるであろう。何より重量級の他書に比べて圧倒的にコンパクトな本書は、持ち運びも容易であり通学、通勤途中をはじめ、どこでも簡単に読みこなせることもありがたい。免疫学に関わる人にとって、身近にあればありがたいをより実感できる稀有な教科書の一つといえる。

（大木伸司 国立精神・神経医療研究センター
神経研究所免疫研究部）